

## P-214

### 成人の小脳に発生した嚢胞性毛様細胞性星細胞腫の1例

古河赤十字病院 脳神経外科<sup>1)</sup>、  
古河赤十字病院 病理科<sup>2)</sup>

○山田 武<sup>1)</sup>、篠田 宗次<sup>1)</sup>、木口 英子<sup>2)</sup>

【緒言】毛様細胞性星細胞腫pilocytic astrocytoma (PA)は小児の小脳、脳幹、視神経などに好発する腫瘍であり、成人に発生することは稀である。われわれは今回、成人小脳半球に発生したPAを経験したので報告する。

【症例】51歳、女性。既往歴：なし。特記すべき家族歴：なし。約1週間ほどの間に比較的強い頭痛が発症。進行し当科外来受診。意識清明で他覚的に神経学的異常所見なし。頭部CT、MRIでは右小脳半球前面に、嚢胞を伴った直径約2cmの占拠性病変をみとめ、実質部分が造影された。手術は、retromastoid retrosigmoidal approachにて、嚢胞開放、実質部分の生検を行なった。病理診断はRosenthal fiberをともなうPA(grade I)であり、免疫染色ではGFAP(+), S-100(+), Vimentin(+), MIB-1陽性率は1.3%であった。術後、頭痛は消失し、新たな神経症状を呈することなく退院された。

【考察】成人の小脳星細胞腫は稀であるものの、intraaxial neoplasmの鑑別診断の一つとして考慮されるべきと考える。また、残存腫瘍に対して放射線などの補助療法を行なうかどうかについては定まった見解はないと思われる。この点については考察を加えたいと考える。

## P-216

### 横浜市立みなと赤十字病院における顔面骨骨折232例の臨床統計的検討

横浜市立みなと赤十字病院 形成外科

○高見麻衣子<sup>1)</sup>、國方 祐輔<sup>2)</sup>、大久保ありさ<sup>3)</sup>、伊藤 理<sup>4)</sup>

【目的・方法】当院は神奈川県横浜市の基幹病院として2009年4月に救命救急センターを併設して以来、外傷患者が多く受診する。2005年4月に開院してから5年間に形成外科を受診した232例の顔面骨骨折の統計に文献的考察を加えて報告する。

【結果・考察】患者数は5年間で増加傾向を示していた。当院救命救急センターは交通外傷を多く受け入れており比較的重度の患者を搬入するという特徴を有している。このため1986年からのシートベルト着用の義務化やエアバック等の安全装置の進化により減少傾向にあると言われている交通外傷だが、当院では顔面骨骨折の受傷原因の最多である。また顔面骨骨折は青壮年層の男性に多いとされるが、当院でも同様で、横浜市では生産年齢人口の比率が高いことに関連していることが推測される。年代別受傷原因を検討すると10歳代ではスポーツ外傷が、青壮年層では交通外傷や暴力による受傷が多く、高齢層では転倒転落が増えていた。若年層では社会活動の活発性が、高齢層では反射的回避能力の低下、骨の脆弱化が大きな要因となるものと考えられる。受傷原因別にみた骨折部位数は頬骨骨折、上顎骨骨折が交通外傷や転倒転落による項目で高い割合を占めており、比較的高エネルギーの外傷であったことが推測された。治療法については59.8%と半数以上が観血的に治療を行っていた。CT画像や模型等で患者に骨折部位を説明し、実際の変形を認識してもらったうえで手術の施行を決定している。

【まとめ】当院に併設された救命救急センターは高エネルギー外傷患者を多く受け入れているため、顔面骨骨折の絶対数は多く、中でも頬骨骨折の占める割合が高かった。顔面骨骨折の院内紹介率が低いことも当院の特徴である。

## P-215

### 松江赤十字病院眼科における特徴的な治療について

松江赤十字病院 眼科

○北川 清隆<sup>1)</sup>、藤原 悦子<sup>2)</sup>、太根 伸浩<sup>3)</sup>、勝本 武志<sup>4)</sup>

【目的】当院眼科における特徴的な治療として(1)Hyperdryy乾燥羊膜による治療(2)エリスロポエチン硝子体内注射(3)ジクロフェナック硝子体内注射があり、これらの治療の対象となった症例を紹介する。

【症例】(1)Hyperdryy乾燥羊膜による治療：富山大学再生医学教室との共同研究：87歳、女性。2012年3月25日夜に転倒し左眼を打撲した。痛みが続くため3月26日に近医を受診し左眼の角膜裂傷、水晶体前房内脱臼と診断され当科へ紹介された。20年前に当科で両眼の線維柱帯切開術を受けていた。左眼は受傷前には既に中心視野が消失していた。角膜縫合術+水晶体摘出+硝子体切除術を施行したが角膜裂傷部位を縫合していくうちに裂傷部位組織の控滅のため穿孔を生じた。術中に緊急的に生体接着剤2-octhyl-cyanoacrylateを用いたHyperdryy架橋乾燥羊膜パッチを施行した。パッチ後43日目後の時点では穿孔部は羊膜に覆われており房水漏出や感染は生じていない。(2)エリスロポエチン硝子体内注射：陳旧性の黄斑浮腫に対してbevacizumab硝子体内注射を施行したが改善が得られない2症例に対してエリスロポエチン硝子体内注射を行い、その1ヶ月後に再度bevacizumab硝子体内注射を施行したところ黄斑形態の改善が得られた。(3)ジクロフェナック硝子体内注射：陳旧性の黄斑浮腫を来している3症例に対してジクロフェナック硝子体内注射を施行したところ2症例においてわずかに黄斑浮腫の改善が得られた。

【結論】(1)角膜穿孔に対する生体接着剤によるHyperdryy架橋乾燥羊膜パッチ法は簡便であり、特に緊急時においてひとつの選択肢になり得ると思われた。また、(2)エリスロポエチン硝子体内注射及び(3)ジクロフェナック硝子体内注射については未だ本邦では行われておらず適応や効果についてさらに症例を重ねて検討したい。

## P-217

### 重傷傷病者が多数発生した大型バス事故において救命しえた顔面多発骨折の1例

前橋赤十字病院 形成・美容外科<sup>1)</sup>、放射線診断科<sup>2)</sup>、  
集中治療科・救急科<sup>3)</sup>

○村松 英之<sup>1)</sup>、林 稔<sup>1)</sup>、佐藤 雅秀<sup>1)</sup>、森田 英夫<sup>2)</sup>、  
中野 実<sup>3)</sup>、高橋 栄治<sup>3)</sup>、中村 光伸<sup>3)</sup>、宮崎 大<sup>3)</sup>、  
町田 浩志<sup>3)</sup>、鈴木 裕之<sup>3)</sup>、藤塚 健次<sup>3)</sup>、雨宮 優<sup>3)</sup>、  
小倉 崇以<sup>3)</sup>、原澤 朋史<sup>3)</sup>

【はじめに】当院は高度救命救急センターをもち、また群馬県の基幹災害医療センターに指定されており、災害時に発生する重篤救急患者の救命医療の中心を担っている。2012年4月29日早朝、関越道で大型バス事故が発生し、残念ながら7人が亡くなる大事故となった。当院も傷病者の救護に対して、集中治療科・救急科を中心とした多くのスタッフが治療にあたった。その中で救命しえた重傷患者の多くが顔面外傷を受傷しており我々形成外科医も大きく治療に携わることとなった。特に重傷な1例を供覧しバス事故と顔面外傷との関連性について若干の文献的考察を加えて報告する。

【症例】症例は18歳、女性。事故により多発顔面骨骨折・顔面挫滅創・外傷性くも膜下出血を受傷した。近隣総合病院に救急搬送され初期治療を行われたが、口腔内よりの出血が止まらず当院へ搬送となった。同日、放射線科による緊急血管造影に続く外頸動脈塞栓術の後、形成外科による観血的整復固定術を行い救命することができた。

【考察】これまでも高速道路上でのバス事故の報告は散見される。どれも多数の重傷傷病者が発生し、救命のための初期治療の重要性が強く言われている。しかし顔面外傷について詳細に述べられた報告はない。今回の事故をみるに、事故発生状況の特殊性もある多くの患者で重傷な顔面外傷を認めた。その中でも本症例が救命できたのは近隣総合病院での初期治療と、それに続く当院での各科の連携が滞りなく進んだためであったと考えられる。